

# 療育を再開した子どもの母親意識の変化

○藤原克実

(NPO こどもの発達研究室きりん)

## 研究の目的

NPO こどもの発達研究室きりんでは、発達に何らかの偏りがあるといわれている子どもたちの発達相談および療育を、児童福祉法に基づく児童発達支援および放課後等デイサービス（2012年3月までは、障害者自立支援法に基づく児童デイサービス）として行っている。利用している子どもたちは、発達障がいという診断のある・なしに関わらず、子どもたち一人ひとりのニーズに合わせて療育を行い、発達を促していけるように多職種が協力して取り組んでいる。また、保護者からの相談を随時受けられるように配慮し、子どものことを保護者と指導員とが常に一緒に考えていけるように取り組んでいる。筆者は過去の発表にて、療育を受けていた子どもの母親の、利用開始時から利用終了時までの意識変化について振り返りを通して検討した。その結果、療育を利用することの母親に対する効果があることが伺われた。本研究では療育を再開した子どもの母親の、最初の利用終了時から再開時および現在に至る意識変化を母親の振り返りを通して検討し、得られた結果を報告する。

## 方法

(1) 対象：当法人における療育の利用を終了していたが、その後利用を再開した子どもの母親3名（Aさん、Bさん、Cさん）。子どもは現在中学生の男子であり、放課後等デイサービスを利用している。AさんとBさんの子どもは普通学級、Cさんの子どもは特別支援学級に在籍している。(2) 実施時期：2017年9～10月。(3) 実施方法：半構造化面接。表1に示す内容について、母親の意識を振り返ってもらった。

## 結果と考察

最初の利用終了時、Aさんは子どもの成長を感じ、その後も母親が子どもの特性を気にかけておくように心がけていたものの、とくに困り感はなく過ごしていたという。BさんとCさんは子どもの成長を感じつつも、終了していいのかなどと不安を感じていたとのこと。再開時までは、不安を感じることがあり、療育の利用を再開したいという思いがあったと語られた。再開のきっかけは、A

表1 母親に振り返ってもらった内容

(最初の)利用終了のきっかけ、思い
利用再開のきっかけ、思い
利用終了時から再開時までの思い
母親にとってのこの場所
子どもにとってのこの場所
この場所への希望
どうなると終了になるか
その他

さんは子どもがゲームを長時間するようになり生活の様子が変わったこと、Bさんは担任の先生とのやり取りが難しくなり、子どもがストレスを感じるようになったこと、Cさんは子どもの小学校への登校が少なくなったことをあげられた。どうなると終了になるかについては、Aさんは子どもに目標となるような存在ができたなら、BさんとCさんは子どもがもう利用しなくてもよいと感じたときではないかと語られた。

3名の母親に共通してみられた意識として、利用を再開してよかったという思い、母親にとってのこの場所は相談できる場であること、子どもを行かせて安心できる場所であることなどが語られた。子どもにとってのこの場所は、小さい頃から自分を知ってくれており自分が出せる場所ではないかと語られた。またこの場所への希望では、思春期の息子への対応として、男性スタッフがいてほしいということなどが語られた。

全体を通しては3名とも利用を再開してよかったという思いを語られ、療育を利用することによって安心感を得られていると考えられる。このように、3名の母親の振り返りにより、放課後等デイサービスを利用することは、母親にとっても効果があることが伺えた。

## 謝辞

ご多忙の中、面接にご協力くださった3名のお母様方、また研究にあたり様々なご協力を賜りました椎野広久理事長をはじめ、スタッフの皆さまに心より感謝申し上げます。